

短期大学生の保育実習後の進路希望に及ぼす自己肯定感の影響

－ 選択理論心理学の視点を取り入れて －

檜林 衿子*・浜崎 隆司**

※松山東雲短期大学・※※鳴門教育大学大学院

Effect of self-affirmation on career aspirations after childcare training for junior college students

－ Incorporating the perspective of choice theory －

Eriko NARABAYASHI ※ and Takashi HAMAZAKI ※※

※ Matsuyama Shinonome Junior College

Kuwabara, Matsuyama

※※ Graduate School of Naruto University of Education

Takashima, Naruto

(Received Jan. 21, 2022)

Summary

The purpose of this study was to classify junior college female students into two groups, those with high aspirations for childcare and those with low aspirations, and how there are differences in the questions regarding self-affirmation during and after the training. It is to carry out quantitative examination and qualitative analysis of whether or not it is possible. Furthermore, using the Choice Theory, we will consider the development of self-affirmation from the perspective of the trainee's basic needs and the high-quality world. As a result, it was clarified that there was a significant difference between the high group and the low group who wanted to be nursery teachers, and that there was also a difference in the words used in the free description. Considering these results from the perspective of Choice Theory, students have a strong desire to become a caregiver by engaging with children and caregivers in practical training and fostering a sense of self-affirmation by satisfying their own basic needs. Can be considered.

I. 問題と目的

保育士養成課程検討会 (2010)¹⁾によると、実践力や応用力をもった保育士を養成するため、保育実習や保育実習指導の充実を図ることの重要性を述べ

ている。将来、保育者を目指す学生にとって保育現場での実習経験は重要であろう。保育士養成校においては、学生が保育者として長年に渡って職に就くことが出来るようにサポートをすることが重要であると考えられる。

保育者養成校の学生にとって実習は必修であり、すべての学生が体験する。特に最初の実習は、実習園の子どもたちとのかかわり、あるいはカンファレンス時の実習園の指導教員や同じ実習生同士の発言など、学生が自信を持ったり、無くなったりする場合もある。この経験は、その後の保育者志望に大きな影響を与えると考えられる。

例えば岩井 (2000)⁽²⁾は、実習生の経験を経た学生に、保育者志望の理由、保育者のイメージについての調査を行っている。その結果によると、子どもが好きで早くから保育所を志望した学生が多いが、授業、実習などを経て、保育士は大変な仕事であると感じていることを報告している。つまり、実習によって保育者としての自信を高める学生もいれば、実習の大変さを実感し保育者としての自信をなくす学生も存在すると考えられる。また、岡本・浜崎・加藤・寺蘭 (2008)⁽³⁾の研究では、保育実習前後の希望職種の違いに注目して実習における経験が学生の希望職種にどのような影響を与えるのかを検討を行った。その結果、8割以上の学生が実習前の進路希望が実習によって変化する事はなかったものの少数ながら保育実習が卒業後の自分の進路に影響している学生も見られた。希望職種内容にかかわらず保育実習によって保育学生の保育者効力感（保育現場において子供の発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念）（三木・桜井；1998）⁽⁴⁾が高くなるということも明らかにされた。

一方、実習前の保育者に対するあこがれが強い学生にとっては、実習によって現実自己の保育能力が認識され、自信を無くしていくという報告もなされている（桜井、1992）⁽⁵⁾。加藤・鈴木 (2011)⁽⁶⁾によると、幼稚園では63%、保育所では81%の割合で3年未満の退職者が存在しており、退職の理由として仕事への適正がないことが挙げられている。また、加藤・安藤 (2021)⁽⁷⁾は、若手保育者の早期離職の要因として自己肯定感の低さが関係していることを示唆している。自己肯定感とは、高垣 (1994)⁽⁸⁾が「自

分が自分であって大丈夫」という感覚のことだと述べている。ありのままの自分を受け入れ自分に自信を持つことが出来ると、保育者になることを選択し、長期に渡って職に就くことが出来る可能性が考えられる。

近年、保育者自身の幸福感に焦点を当てた理論が提唱されている。例えば、まず保育者が自己肯定感を高く持ち、保育者自身が幸福であることを優先する選択理論心理学（以下、選択理論とする）がある。選択理論は、アメリカの精神科医 William Glasser によって提唱された人間関係に焦点をあてた心理学である。Glasser (1998)⁽⁹⁾は、人は生まれながらに持っている基本的欲求を満たすために内発的に動機づけられ行動することを主張しており、基本的欲求が満たされると幸福感を感じ、基本的欲求が満たされないで悩みやストレスが生じるとしている。選択理論では、人は生まれながらに愛し愛されたい誰かと一緒に居たいという『愛・所属の欲求』、認められたい誰かの役に立ちたいという『力の欲求』、自分のことは自分で決めたいという『自由の欲求』、楽しいことをしたいという『楽しみの欲求』、食いたいとか寝たいとか心身ともに健康でいたいという『生存の欲求』の5つの基本的欲求を持っているとする。さらに Glasser (1998)⁽⁹⁾は、人の基本的欲求を満たす人や物や信条がイメージ写真として入れられている脳の部分を上質世界（願望）といい、上質世界（願望）に入っているイメージ写真は本人のみが入れ替え可能であることが指摘されている。また、人がやる気を起こすのは、上質世界（願望）の実現を目指している時であることから、上質世界（願望）にどんなイメージ写真を入れるかは、人生においてとても重要なことであるとも指摘されている（Glasser, 1998）⁽⁹⁾。

保育実習後保育者になりたいという思いが低下する学生は、保育実習において自分の持っている基本的欲求が満たされないことで、保育そのものへの関心が低くなり、保育志望を断念するのではないかと考えられる。例えば、幼い子どもとたくさんかわり

たいという欲求（愛・所属の欲求）を持っている実習生が、実習中に子どもとのかかわりが思ったより少なくて満たされなかった。また、将来保育士として自信を持ちたい欲求（力の欲求）を持っている実習生は、実習園の指導教員からきびしい指導を受けて自信を喪失し、欲求が満たされなかったような場合など、自己肯定感も下がり、保育者になりたいという思いが低まるのではないかと考えられる。

柿谷・井上（2011）⁽¹⁰⁾の自分を認めてくれる人がいると基本的欲求が充足し、自己肯定感が育まれるという指摘を保育養成校と学生との関係に当てはめると、保育養成校で学生の基本的欲求が充足や自己肯定感を育むような援助を行うことで学生は基本的欲求が満たされ自己肯定感が高まり、保育者として働くことを選択することができるということになろう。これまでの選択理論に関する先行研究を概観すると、選択理論を小学校で実践し、児童の自己肯定感を育むことに有効であることを示している研究はあるものの（井上，2004）⁽¹¹⁾、保育学生を対象とした研究は見られない。

保育者養成校の学生にとって実習は必修であり、すべての学生が体験する。特に最初の実習は、実習園の子どもたちとのかかわり、あるいはカンファレンス時の実習園の指導教員や同じ実習生同士の発言など、学生が自信を持ったり、無くなったりする場でもある。この経験は、その後の保育者志望に大きな影響を与えと考えられる。

本研究の大きな目的は、短期大学女子学生を対象として、実習後、保育者志望の高い者と低い者の2群に分類し、実習中、実習後の自己肯定感に関する質問においてどのように違いがみられるのかの量的検討を行い、保育者志望の背景にある両群の思いについての自由記述を基に質的分析を行うことである。さらに、選択理論を用いて、実習生の基本的欲求や上質世界の視点から、自己肯定感の育成についての考察を行う。

Ⅱ. 方法

1 調査時期

2021年11月26日～12月3日

2 調査対象者

Z県内の保育者養成校に在籍する短期大学1年生112人（女性）。

3 調査方法

質問紙を配り研究の目的を伝え同意を得た。質問内容は Table 1に示す。研究の趣旨について文章と口頭にて説明をし、同意を得た回答をデータとして使用した。得たデータを保育者志望の高い者と低い者の群に分類し t 検定を行った。自由記述文の分析手続きとしては記載されたデータについて KH Coder（樋口，2014）⁽¹²⁾を用いてテキストマイニングを行いデータの解釈を行った。

4 倫理的配慮

質問紙の回答は研究以外には利用しないこと、論文作成後は速やかに破棄すること、また回答の内容から個人名が特定されないよう匿名化することを伝えた。なお、この質問紙の内容は松山東雲女子大学・松山東雲短期大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認を得ている（申請番号 2021-114）。

Ⅲ. 結果と考察

Q17の回答から保育者志望が高い者を高群、低いものを低群に分け、Q1からQ16の質問内容において Welch's t-Test による t 検定を行った。分析の結果を Table 2に示す。

分析の結果、Q3「何事にもチャレンジしようと思えた」($t(91)=2.30, p<.05$)、Q6「朝起きると、今日も実習を頑張ろうと思えた」($t(91)=2.92, p<.01$)、Q7「保育者から指導を受けたとき、次からは改善して頑張ろうと思った」($t(91)=2.77, p<.05$)、Q13「実習が楽しかった」($t(91)=2.72, p<.05$) Q14「改めて子どもが好きだと感じた」($t(91)=3.55, p<.01$)、Q16「自分は保

Table 1 質問内容

(1)実習中について
Q1実習準備も意欲的にしていた。
Q2分からないことは実習先の保育者に積極的に質問した。
Q3何事にもチャレンジしようと思えた。
Q4実習先の保育者からどう見られているのか気になった。
Q5大学の授業での学びを生かすことが出来た。
Q6朝起きると、今日も実習を頑張ろうと思えた。
Q7保育者から指導を受けたとき、次からは改善して頑張ろうと思った。
Q8実習日誌は自分なりに良く書けた。
Q9失敗しても、次は上手くやろうと思った。
Q10睡眠時間の確保が出来た。
Q11自分の保育観と実習先の保育観にズレを感じた。
Q12笑顔で過ごすことが出来た。
(2)実習後について
Q13実習が楽しかった。
Q14改めて子どもが好きだと感じた。
Q15保育は子どもの成長を間近で見ることの出来る職業だと思った。
Q16自分は保育者に向いていると感じた。
Q17実習での経験は将来保育者になりたいという気持ちにどのような影響を与えましたか？当てはまるほうにチェックを入れて、その理由を書いてください。
<input type="checkbox"/> どちらかかというよりも以前よりも保育者になりたい意欲が高くなった
【理由】
<input type="checkbox"/> どちらかかというよりも以前よりも保育者になりたい意欲が低くなった
【理由】

Table 2 Q1～Q16における高群と低群の比較 (SD) (Welch's t-Test)

質問	高群	低群	t 値	p 値
Q1	4.36 (.66)	3.94 (.75)	2.0225	†
Q2	4.18 (.83)	3.88 (.11)	0.9609	n. s.
Q3	4.30 (.68)	3.69 (.98)	2.3026	*
Q4	4.58 (.61)	4.44 (.79)	0.6513	n. s.
Q5	4.00 (.60)	3.75 (.56)	1.5685	n. s.
Q6	3.97 (.82)	3.38 (.70)	2.9204	**
Q7	4.75 (.43)	4.31 (.58)	2.7736	*
Q8	3.96 (.83)	3.63 (.99)	1.2097	n. s.
Q9	4.43 (.57)	4.13 (.78)	1.4161	n. s.
Q10	3.16 (1.11)	2.81 (1.38)	0.9265	n. s.
Q11	2.31 (1.01)	2.63 (1.27)	0.9209	n. s.
Q12	4.62 (.51)	4.13 (.93)	1.9880	†
Q13	4.42 (.78)	3.56 (1.17)	2.7283	*
Q14	4.86 (.35)	4.13 (.78)	3.5517	**
Q15	4.88 (.32)	4.63 (.60)	1.5712	n. s.
Q16	3.87 (.65)	2.69 (.77)	5.5713	**

† < .10 * < .05 ** < .01

育者に向いていると感じた」($t(91)=5.57, p<.01$)に有意差が見られた。また、Q1「実習準備も意欲的にしていた」($t(91)=2.02, p<.10$)、Q12「笑顔で過ごすことが出来た」($t(91)=1.98, p<.10$)において傾向差であるが有意傾向がみられた。これらの結果はすべて、高群は低群と比較して有意に得点が高かった。

Q17においては、実習後保育者になることの意欲の高低について質問し、その理由を自由記述させた。その結果、総数93名の内高群が77人、低群が16人であった。自由記述の内容については、高群、低群別にKH Coderを用いて質的研究を行った。KH Coderでは、各文書からコンピュータが自動的に語を抽出するため、分析対象となる語を選択するなどの手作業が取り除かれ、分析者の予断や理論によるバイアスなどからくる恣意性が極力排除される仕様となっている(吉田・浜崎・黒田, 2018)⁽¹³⁾。

全体における頻出語の上位30語とその出現頻度をTable 3に示す。「子ども」の出現回数が141回であり、保育実習において常に関心的是子どもであることが見て取れる。そして、「改めて」や「好き」の出現回数が多いことから、保育学生は実習を通じて自身は子どもが好きなることを再度認識出来たことが窺える。澤田・上手・奥野(2013)⁽¹⁴⁾は保育実習を通じて漠然としていた子どものイメージが豊かで生き生きとしたものへと変化すると指摘している。実際に子どもと関わる経験は、保育学生の子どもに対す

る思いの変容に影響を与えることが考えられる。一方で「大変」や「不安」という語句も頻出していることから、初めて経験する保育現場での実習で自分の保育に対する考えとのギャップを感じ、自分は保育者に向いているのか悩む学生がいることも考えられる。小島(2020)⁽¹⁵⁾は、養成校の時代の実習でリアリティ・ショックの前兆があることを示唆している。保育養成校においては、実習前に保育現場ではどのような業務を行うのかを学生に伝え、実習後に保育者となることに対して消極的になっている学生の心理的なサポートを行い、学生の自己肯定感を育むことが求められていると考えられる。

Q17の自由記述における頻出語の共起ネットワークで分析した結果、Figure 1のような6つのグループに分類された。共起ネットワークとは、出現するパターンが似ている語句を線で結んだネットワークを描くものである。係数が大きいほど線で結ばれている語句の間に強い共起関係にあることを示している。また、出現数の多い語句ほど大きい円で示されている。

まず、Aグループは「子ども」「成長」「嬉しい」「好き」「学ぶ」といった『子どもの成長と子どもへ思い』を表すイメージの語句で構成されている。Bグループは「保育」「仕事」「関わる」「実習」といった『保育現場や業務』を表すイメージの語句で構成されている。Cグループは「自分」「不安」「向く」「意欲」といった『自身の保育者への適正』を表すイメージ

Table 3 Q17における頻出語の上位30語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	子ども	141	11	仕事	20	21	行動	8
2	保育	70	12	楽しい	19	22	姿	8
3	思う	54	13	見る	19	23	多い	8
4	感じる	51	14	実際	16	24	不安	8
5	関わる	33	15	大変	14	25	意欲	7
6	実習	29	16	気持ち	11	26	学ぶ	7
7	成長	29	17	強い	9	27	間近	7
8	自分	28	18	先生	9	28	たくさん	6
9	改めて	21	19	関わり	8	29	見守る	6
10	好き	20	20	嬉しい	8	30	実感	6

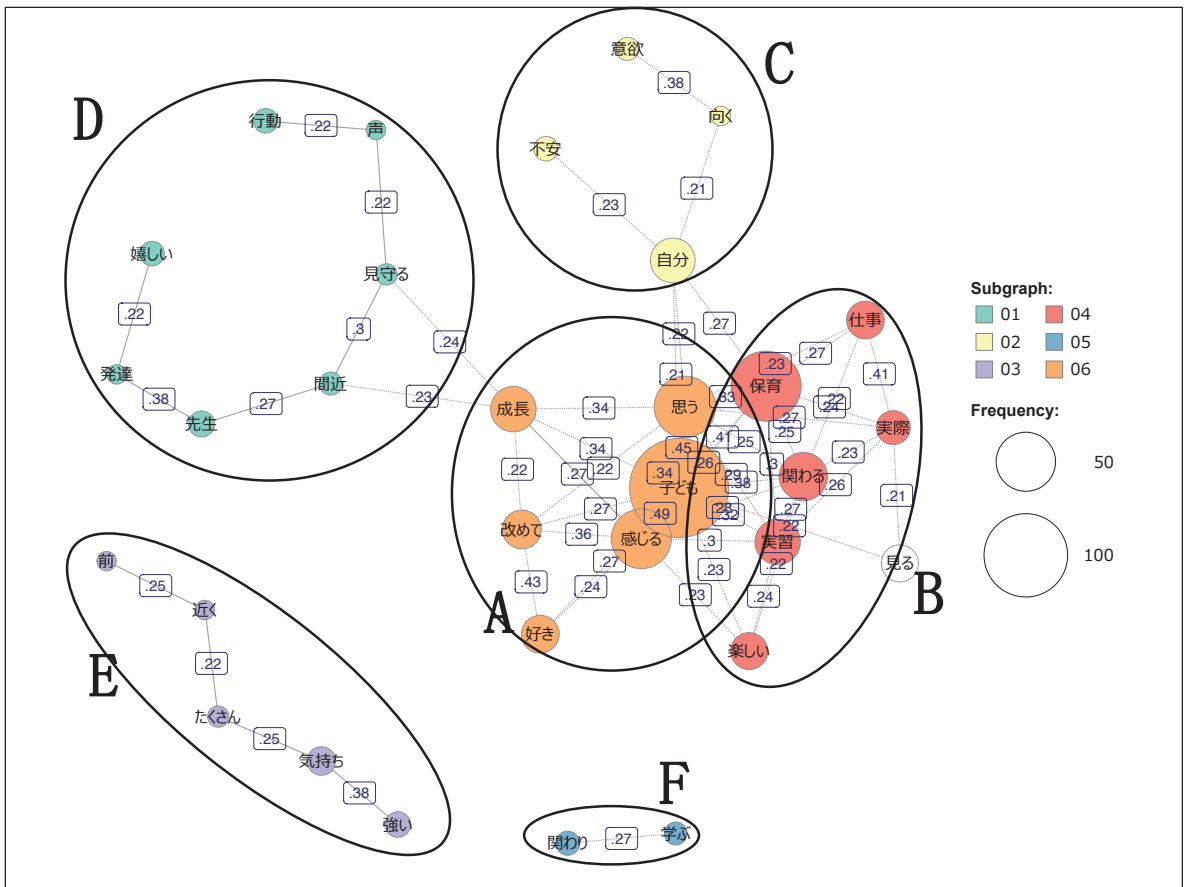


Figure 1 Q17の自由記述における頻出語の共起ネットワーク

の語句で構成されている。Dグループは「先生」「発達」「間近」「見守る」といった『子どもの発達を見守る』イメージの語句で構成されている。Eグループは「気持ち」「強い」「たくさん」と『保育職への意欲』を表すイメージの語句で構成されている。Fグループは「関わり」「学ぶ」といった『実践を通しての学び』を表すイメージの語句で構成されている。共起ネットワークで分析をした結果、『子どもの成長と子どもへ思い』『保育現場や業務』『自身の保育者への適正』『子どもの発達を見守る』『保育職への意欲』『実践を通しての学び』の6つのイメージが存在していることが示唆された。以上から、保育実習を通して学生は実際の保育業務を一部体験し、子どもの成長や発達を近くで見て関わることで自身

が保育者に向いているのかどうかを考えることが読み取れる。

保育者志望高群における頻出語の上位30語とその出現頻度を Table 4に示す。「楽しい」「好き」「嬉しい」の出現回数が多いことから、保育者志望の高い学生は実習で子ども達と関わることで自身が保育者となることに意欲を持つことが出来たと見てとれる。この結果は Table 3の結果とも一致する。

また、実習の中で「大変」さを感じることもあるが、自由記述から「大変だと改めて感じたけど、子どもとかかわるのが好きだし、自分の声かけで動いてくれたときに嬉しく感じたから」「大変さも感じたけど、それ以上に子どもと関わることの楽しさややりがいを感じたから」といった子どもと関わるこ

Table 4 Q17の高群における頻出語の上位30語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	子ども	135	11	見る	17	21	学ぶ	7
2	保育	55	12	仕事	17	22	先生	7
3	感じる	45	13	自分	17	23	間近	6
4	思う	45	14	実際	14	24	行動	6
5	関わる	33	15	大変	11	25	実感	6
6	成長	28	16	気持ち	10	26	笑顔	6
7	実習	26	17	強い	9	27	たくさん	5
8	改めて	21	18	関わり	8	28	意欲	5
9	楽しい	18	19	嬉しい	8	29	近く	5
10	好き	18	20	姿	8	30	経験	5

とへの楽しさややりがいを感じていることも明らかとなった。

保育者志望低群における頻出語の上位30語とその出現頻度を Table 5に示す。低群においては保育実習の中で「大変」さや「不安」を感じたことが読み取れる。自由記述から「思ったよりも大変そうで自分にできるか不安になった」「思っていたより大変だった」といった自身が想定していた業務内容とのズレを感じていたことも窺える。高群ではズレを感じたとしてもそれ以上に保育の面白さややりがいを感じている学生が多いが、低群ではズレを感じたことで保育者として職に就く意欲が低下したことが両群の大きな差と言えよう。

また、「職務内容と給料が見合わない。大変」や「勤務時間が長く、給料も少ないのに仕事の量と合っていないと感じた」という記述もあったことから、実習を経験したことで実際の仕事の量と給料について

疑問を感じる学生もいたことが明らかとなった。厚生労働省（2021）¹⁶のデータを概観すると、保育士と幼稚園教諭の平均月収は共に約24万4千円であり、全業種と比較すると約10万円低い。子どもの命に向きあう職業の賃金の在り方については今後検討されるべき課題であると考ええる。

これらの傾向を選択理論における基本的欲求や上質世界を基に考察すると、保育実習を体験する中で自身の基本的欲求や上質世界が充足されると保育者を志すことに繋がると考えられる。保育者志望高群の自由記述の「楽しかった、やりがいを感じた。もっとできることを増やして、子どものためになることができたらと思った。」や「何よりも『先生！』と笑顔で呼び、したってくれる子どもたちを愛おしく思った。といった内容から、保育者になる意欲が高くなった学生は『子どもも自分も楽しく活動する』というイメージを自身の上質世界に入れており、実

Table 5 Q17の低群における頻出語の上位30語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	保育	14	11	大変	3	21	職場	2
2	自分	11	12	不安	3	22	人	2
3	思う	9	13	1つ	3	23	先生	2
4	感じる	6	14	コミュニケーション	2	24	内容	2
5	子ども	6	15	意欲	2	25	分かる	2
6	合う	5	16	給料	2	26	保護	2
7	向く	3	17	見る	2	27	たくさん	1
8	仕事	3	18	好き	2	28	チェック	1
9	実習	3	19	行動	2	29	マイナス	1
10	多い	3	20	実際	2	30	ミス	1

習を通して子どもとの良好な関係が構築されたことで『愛・所属の欲求』が充足されたと考えられる。柿谷 (2003)⁽¹⁷⁾が、基本的欲求は身近な重要な人との人間関係が良好である時に満たすことができると述べていることから子どもとの関係が欲求充足に繋がる可以说えよう。そして自身の欲求が充足されたことで自己肯定感も高くなったと考えられる。実習という短期間ではあるが、その中で子どもとの良好な関係が構築されたことは、自己肯定感の育みとその後の進路選択に大きく影響すると考えられる。

保育者志望低群の自由記述の「人とコミュニケーションをとることが苦手なので実際に保育者になったときに保護者の人などとコミュニケーションをとれるか心配になった」や「先生方の1つ1つの行動が自分にはできないのではないかと思います、とても不安になりました」といった内容から、保育者になる意欲が低くなった学生は『子どもも自分も楽しく活動する』というイメージを上質世界に入れていたが、実習で自身の能力と保育現場で求められることのギャップを感じ、『愛・所属の欲求』や『力の欲求』が満たされなかったのではないかと考える。養成校の教員は学生の欲求充足のサポートを行い、学生が自身を信じて保育者となることが出来るように努めることが重要である。

IV. 総合考察

保育者志望高群と保育者志望低群を比較すると、自己肯定感に関する実習中・実習後についての質問内容においていくつか差が見られるものがあった。自己肯定感が高いと実習に意欲的に取り組むことができ、自身の至らなさを感じても更に学びを深めて次は改善しようと考えてことが示唆された。実習に楽しさを感じたことから、実習後に保育者になりたいと強く感じる事が明らかとなった。また、自己肯定感が低い学生は実習にも消極的になり、保育者から指導を受けると「自分は保育者に向いていな

い」と感じることも示唆された。実習後には保育者となることに自信を失くし、進路選択に悩むことが考えられる。教員は自己肯定感の高低が実習への取り組みやその後の進路選択に影響を与えることを理解し、学生の自己肯定感が育まれるように指導をすることが重要である。

また、保育者志望高群と低群それぞれの自由記述の頻出語句においても違いが見られた。高群では「楽しい」、「好き」、「嬉しい」の出現回数が多く「大変」さを感じても子どもと関わる楽しさややりがいを感じていることが明らかとなった。低群では「大変」や「不安」の語句が頻出しており、自身が想定していた以上の大変さを感じたことで保育者を志す意欲が低下したことが示唆された。

以上の結果を選択理論の視点を用いて考察すると、学生は実習で子どもたちや保育者と関わり自身の基本的欲求が充足することで自己肯定感が育まれ、保育者になることをより強く望むことが考えられる。実習前の指導においては学生の満たしたい欲求は何か、上質世界にどのようなイメージが入っているのかを明らかにし、学生の欲求が充足し自己肯定感が高まるようにサポートを行うことが求められるであろう。

V. 今後の課題

本研究で明らかとなった結果は初めての实習を経験した短期大学1年生112名の学生のアンケートデータを分析したものであり、新たにデータを追加すると、結果が変化する可能性も考えられる。今後も学生への調査を行い、自己肯定感が実習後の進路選択にどのような影響を与えるのかを選択理論の視点で検討を重ねたい。また、今後は短期大学2年生にも調査を行い、実習を経験する中で自己肯定感の高低が変化するのか、どのようなシチュエーションにおいて学生は基本的欲求が充足されるのかについても更に精査する必要があると考える。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、アンケートにご協力いただきました乙県の短期大学1年生の皆様にご心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1 保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)」(厚生労働省, 2010年)
- 2 岩井勇児「保育科学生の保育者観の形成」(名古屋柳城短期大学研究紀要, 第22号, 2000年) 137-149頁
- 3 岡本かおり・浜崎隆司・加藤孝士・寺園さおり「保育実習が保育士志望および保育者効力感に及ぼす影響」(旭川荘研究年報, 第39巻第1号, 2008年) 32-37頁
- 4 三木知子・桜井茂男「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」(教育心理学研究, 46巻2号, 1998年) 203-211頁
- 5 桜井茂男「教育学部生の教師効力感と学習理由」(奈良教育大学教育研究所紀要, 第28巻, 1992年) 91-101頁
- 6 加藤光良・鈴木久美子「新卒保育者の早期離職問題に関する研究Ⅰ～幼稚園・保育所・施設を対象とした調査から～」(常葉学園短期大学紀要, (42), 2011年) 79-94頁
- 7 加藤由美・安藤美華代「若手保育者の離職防止に向けてー園長を対象とした質問紙調査からー」(保育学研究, 第59巻第1号, 2021年) 117-130頁
- 8 高垣忠一郎「子どもの個性と自己肯定感」(国土社, 教育44(3), 1994年) 15-24頁
- 9 William Glasser ,M.D. 「CHOICE THEORY」(Harper Perennial, 1998年)
- 10 柿谷正期・井上千代「選択理論を学校にークオリティ・スクールの実現に向けてー」(ほんの森出版, 2011年) 43頁
- 11 井上千代「選択理論との出会いと保健室での実践」(選択理論心理学研究, 8(1), 2004年) 61-68頁
- 12 樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析ー内容分析の継承と発展を目指してー」(ナカニシヤ出版, 2014年)
- 13 吉田美奈・浜崎隆司・黒田みゆき「幼児の添い寝に関する実態調査」(上田女子短期大学紀要, 第四十一号, 2018年) 1-16頁
- 14 澤田英三・上手由香・奥野雅子「保育体験は女子大学生の子ども観・子育て観をどのように変えるのか?」(安田女子大学紀要, 41, 2013年) 103-114頁
- 15 小島千恵子「学生は「保育実習」から何を学ぶのか」(名古屋短期大学研究紀要, 第58号, 2020年) 59-69頁
- 16 厚生労働省「保育士の現状と主な取組」(保育の現場・職業の魅力向上検討会(第6回), 2021年) 1-86頁
- 17 柿谷正期「教育と暴力」(選択理論心理学研究, 7(1), 2003年) 3-9頁